

イリヤ プーシキン

凧に書かれた詩



イリヤ プーシキン

凧に書かれた詩

校正： 大久保裕美

挿絵： マーシャ トウカチェンコ

装丁： シモーナ ヴェイスベルグ

2011 © Jerusalem, Ilya Pushkin

www.pushkin-japan.com

凧

凧に私の詩を書いて
空高く上げる。

天に住む
鳥と天使に
私の詩を読んで
楽しんでもらうため。

夜のお客さん

毎晩ベッドで横になっていると
過去からお客さんが次々と
私のところにやって来る。

私を離れた女性や
私を去った友人や
亡くなった親戚などが
順番で私を待っている。

彼らはそれぞれ
私たち共通の過去を
私と一緒に思い出したり、
私たちの別れについて
私と一緒に泣いたり、
過去の喧嘩と議論を止めて
和解したり、
お互いに許したりする。

まだ生きている繋がりを
切るのは
とても苦痛なので、
私は
誰も心から
引き抜くことが
できないし、
誰をも

愛するのをやめることが
できないし、
誰にも
「さようなら」を言うことが
できないし、
それに
「決して」という言葉の意味を
理解することも
できない。

夜明け前になると
大切なお客さんは
振りかえって私を見て、
そして
次々と去って行く・・・

詩の胎動

まだはっきりしない
詩の小片の動きを
頭の中で感じている。
詩の発生は
胎動のようだ。

上野動物園

檻に入れられた動物が
檻から解放された生徒たちと
向き合っている。

優しそうな
おばあさん。
勇ましい顔の
おじいさんと、
動物に餌をやっている孫に
アイスクリームを食べさせている。

腹切りの詩

腹切りという言葉で
間違いをした詩人は
腹切りをするだろう。

日本語で書く詩人は
生き残るために
日本語を
勉強しなければならない。

生徒の口

よい先生は
一口サイズの授業をする。
だけど、
よい生徒には
大きな口が必要だ。

＊

日本語で詩を
書かない外国人は、
どうして日本語を
勉強するのだ？

*

いっぱいになったお腹は
空っぽな頭に
「お馬鹿さん、もう食べないで！」
と言っている。

日本の詩人の規則

日本の詩人は
面白くない詩を書くと、
小指を詰められる
と私は聞いた。

日本で
小指がない人を
見たら、
彼は
つまらない詩人かもしれない。

全ての指を守るために、
一生懸命
私は面白い詩を
書く努力をしている。

冬

窓の向こうで
舞い落ちる
ひとひらの雪を
眺めている女性は
愛する人を
思っている。

桜の花びらが
舞い散って
ピンクの絨毯が
地面に敷かれると、
彼女の大切な人が
来るだろう。

でも、今は
窓の向こうに
雪の白い絨毯が
敷かれている・・・

＊

まだ日本語が
できない外国人は
死んだ後
天国で
何をするのだろうか？

日本の
美しい女性教師と
日本語を
勉強するのだと思う。

でも、私が
日本語を
習得することは
永久にないかもしれない。

寒いから

主人の暖かさなく
家に残る
冷えきった主婦は
雪達磨になり、
心が冷たい主人は
冷凍肉になる。

夜の街で

私の足音が
夜の大きな街に
響きわたる。

私はひとり
無人の通りを
ぶらぶら歩いている。

夜の警察官は
通りを
くまなく知っている
けれども
夢の中で
私の恋人の住所を
教えてくれない。

だから私は
朝まで
無人の通りを
ひとり
ぶらぶらと歩き続ける・・・

彼女の答え

「どうして私のところに
危険から避難しに来ないの？」
と私は彼女に尋ねた。

「あなたのうるさい詩は
危険よりもっとひどいから」
と彼女は答えた。

期待していなかった知らせ

スチュワーデスの妊娠について
知らせが届いたので、
そのフライトのことが
頭に浮かんだ。

でも、高い空の飛行機で
何が起こったか
思い出すことができない。

とにかく、
空で妊娠した彼女には
天使が養育費を
払うだろう。

原宿の膝

原宿を歩いている
外国人旅行者の心が
日本の少女の膝で
挟まれている。
いったい何が
彼の胸の中で
どきどきしているのだろうか？

新しい詩

どきどきするのは
心の扉を
誰かが
叩いているからだ。

新しい詩がやって来た
ようこそ！
待ち望んでいた愛の
前触れだ。

雑草だけ

うっかり
一番きれいな花を
むしりってしまった。

私の心の庭に
雑草だけが
残った。

今は
雑草の中に
美しさを
見出そうとしている。

私の生き物の栄養

音楽が
心の中にいる
生き物の
栄養だ。

私の心の中にいる
生き物は
日本の恋歌だけを
食べられる。

原宿の膝のこと

原宿駅で降りれば、
明治神宮で
跪くか
原宿通りで
少女の膝を眺める
ことができる。

車内で「原宿駅」
というアナウンスがあると、
少女の膝が
好きな乗客が
仕方なく降りる。

*

夜、家に入ったら、
すぐにドアを閉めて。
暗闇と一緒に
夜の鬼が
入って来ないように。

春の心

押入れから出した
春の服から
カビを取って
着る。

物置から出した
心から
カビを取って
恋をする。

長い冬眠の後
ぺこぺこの私の心は
君の愛を探している。

「さようなら」の毒矢

彼女らの
「さようなら」という
毒矢が
あちこちから
私めがけて
飛んでくる。

たくさん
刺さった矢のせいで
私の心は
針ねずみ。

でも、君の
「さようなら」という
毒矢だけは
私の心に
当たらない。

*

息んで出た
汗と血とで混じりあうインクから
詩が
生まれてくる。

